NO.19 2016.2

JCAS

Newsletter from Japan Consortium for Area Studies

地域研究コンソーシアムニューズレター

■地域研究コンソーシアム賞（第5回）

◆研究作品賞　◆登竜賞　◆社会連携賞

■境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）の活動紹介

■公開シンポジウム

▶境界境域への挑戦と『地域』

■SGHとJCAS

▶高校生からの地域研究―地域立脚型グローバル人材の育成をめざして

■新規加盟組織紹介

▶大東文化大学大学院アジア地域研究科

♠ オランダの秋

秋のオランダには、北半球の同じような緯度にある日本とどこかよく似た森林がある。季節が移り変わり、年の終わり頃、色づいた木々の葉と秋の陽光が織りなす風景はあまりにも美しい。よく保存された森林景観は一国の自然文化史を雄弁に物語る、今も息づく過去の記憶である。

（Photo＆Text by Wil de Jong，翻訳：柳澤雅之・二宮さち子）

第５回（2015年度）地域研究コンソーシアム賞　決定

第5回（2015年度）地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）の授賞対象作品ならびに授賞対象活動が決定しました。

【研究作品賞授賞作品】

横山 智 著

『納豆の起源』NHK出版

【登竜賞授賞作品】

箕曲 在弘 著

『フェアトレードの人類学―ラオス南部ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』めこん

小西 賢吾 著

『四川チベットの宗教と地域社会―宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』風響社

【研究企画賞授賞活動】

該当なし

【社会連携賞授賞活動】

境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）

「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」

＜講評＞

研究作品賞授賞作品

◆ 横山 智 著『納豆の起源』NHK出版

B6判 317頁
ISBNコード：9784140912232

本書は、ラオス、タイ、ミャンマー、インド、ネパールなど、東南アジア大陸部からヒマラヤに至る照葉樹林帯において様々な民族がつくる納豆の製法と利用方法を基にして納豆の起源を探った作品である。まず納豆の原料となる大豆の栽培起源に関する議論、そして日本を中心とした発酵大豆食品の先行研究を幅広くレビューするところから始まり、各地の納豆をつくる際に必要となる菌の供給源となる植物利用、加工の形状、利用方法が詳細に記述される。そして、納豆生産と利用の共通点と差異から納豆の発展段階論を提示し、さらに納豆加工形状の空間的分布を発展段階論と空間的に重ね合わせることで納豆の起源仮説を導き出す。フィールドワークによって得られたデータを基に論じられた本書は、納豆の地域的多様性を明らかにして魅力的である。納豆の菌を研究する微生物学分野からの納豆起源研究には限界があることも明確に述べられている。

本書の問いは極めて単純でわかりやすい。それは、どこにどのような納豆が存在し、その発祥はどこかを探るものである。横山氏は15年間にわたる地域横断的なフィールドワークによって、これまで納豆の報告がなかった東南アジア大陸部とヒマラヤの未調査地域を含む63地点を踏破し、独自の論を立て、その問いに答えた。フィールドワークから生まれた新たな知見の提示と特定の専門分野の視点を超えて論じられた方法論が非常に高く評価された。納豆は照葉樹林文化の文化要素のひとつとされているが、横山氏は照葉樹林文化論における納豆の位置づけをも修正して

おり、40年以上の月日が経過している照葉樹林文化論の再考を促す上で大きな学術的貢献を果たしていることが特筆される。

本書は、学術書としてばかりではなく、一般読者にも分かりやすく、親しみやすく書かれており、幅広い読者を満足させることができる情報を提供している点で秀逸の作である作品と判断された。ただし、多様な納豆文化をすべて「伝播論」で解釈しようとしている点については、もう少し異なる観点から納豆文化論を展開できたのではないかという意見が審査委員の間で意見されたことも付言しておきたい。民族接触などにより食文化が伝播することは十分に起こりうることであるが、発酵した大豆の利用そのものは、各地域の食文化、気候などの特性により独自の発達を遂げ、多様な納豆文化圏が生まれたということも考えられる。納豆食文化圏という類型から東南アジア地域の食文化を再構成するという今後の展開も期待したい。

登竜賞授賞作品

◆箕曲 在弘 著『フェアトレードの人類学―ラオス南部ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』めこん

この作品は、南北問題の重要なテーマであるフェアトレードを対象とする。著者の箕曲氏はラオス南部のボーラヴェーン高原におけるフィールドワークに基づき、理論と実証の両面から考察している。世界貿易の一角を占めるまで、拡がりつつあるフェアトレードは、市場経済との距離の取り方から大きく、認証型と連帯型に分類される。小農生産者にとって、双方が持つ利害得失を厳密かつ丁寧に検討し、その問題点を明らかにしている。カール・ポランニー以降の経済人類学の成果を咀嚼し、経済関係を社会に埋め込む論理を展開している。その方法論の吟味も、生産から流通・消費に至るデータの活用も、きわめて周到になされている。

A5判 475頁
ISBNコード：9784839602857

500ページ近くの大著であり、多種多様のデータ分析を行っているため、一見して取りつきにくい学術書のような印象を与えるが、謎解きのようなフィールドワークの面白さに引き込まれる。抑制のきいた文体で記述されてはいるが、箕曲氏は窮屈な学術研究の壁を乗り越えようと試みている。結論として、アジア農村社会を内在的に調査する人類学が、生産者の課題を消費者に伝える代理人になる道筋を示している。関連する分野に過不足なく、目配りをした完成度の高い学術研究である。しかし、学術研究にとどまらない社会貢献の作品でもある。

国際貿易において貧しい生産者と豊かな消費者が取引をする場合、フェアトレードは公正な取引を行い、生産者の経済生活を向上させる、というのが北側諸国の通説である。著者はフィールドワークの成果を携えて、この通説に挑戦する。ボーラヴェーン高原におけるコーヒー生産者組合では、フェアトレード運動を通じて経済的な利得は得られなくとも、人びとが対等な社会関係を形成させようとしたことがわかる。本書で扱われているコーヒー豆は、フェアトレードが得意とする商品である。フェアトレード自体がグローバルな現象であり、この作品は他地域への示唆に富む研究でもある。従来ラテン・アメリカやアフリカの産地における研究が主流であるが、ラオスの事例を踏み台に東チモールなどのアジアのコーヒーとの比較研究を進めて欲しい。また、北側諸国の経済論理に挑戦するアジアの論理を求めるならば、フェアトレードとは異なるアジアの運動、例えば、同じアジアの国である日本の生活協同組合運動といった消費者運動など、我が国の身近な事例なども省みた研究も必要であるとの指摘もあった。

フェアトレード運動は、消費者と生産者の間の障壁を乗り越える可能性を開く、と著者は信じる。この人類学的な挑戦に期待し、「フェアトレードの人類学」は登竜賞にふさわしい、と評価する。

◆小西 賢吾 著『四川チベットの宗教と地域社会―宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』風響社

小西氏の著書は、社会主義国家中国のもとで生きるチベット人社会に関する実証的な研究は、端緒を開かれたばかりといえるなかで、長期間のフィールドワークに基づき、改革開放後の四川省のチベット社会における宗教実践の復興と存続の諸相を僧職者側と世俗側の双方から解き明かした初めての民族誌といえるものである。とくに、宗教実践の活性化の諸相について、ボン教僧院と村の人々の宗教実践に深く寄り添い、いかなる要素が人々を宗教に巻き込み

つなぎ止めるのかという点からアプローチしていったことは非常に独創的なものである。

A5判 374頁
ISBNコード：9784894892101

本書の最大の特色は、改革開放後の宗教の活性化と維持の問題を、ボン教僧院の経済的基盤という点ばかりではなく、僧院を中心あるいは村の行事としての宗教実践が世俗の人々を巻き込んでいく、心と身体の問題として活写した点にある。そこでは、「加行」という宗教実践にみる「反復を生み出す達成感と一体感」、「身体に刻まれる修行」、チョルテン建設にみる「蕩尽ともいえる膨大な物品の投入」というように、身体化や可視化といった人々の心や身体への直接的な訴えが人々を宗教実践に巻き込んでいく決定的な要素となり、人々の共同性が紡ぎ出されることが明らかにされる。

本書が、ボン教という宗教の活性化と維持装置に限定された議論で終わっている点には、物足りなさも指摘された。地域の実情を鑑みて難しさがあるとはいえ、地域にとって重要な文脈であるはずのボン教と中国政府や四川チベット社会との関係を捉える説明や分析が不十分であるとの指摘もあったが、地域研究としての方法論の完成度や学術的成果という点では評価が一致した。地域に深く入り込んだフィールドワークにもとづき実証的に明らかにされた、宗教の維持装置となる「身体性」「熱狂的な人々の巻き込み」という問題は、日本の伝統社会における「祭り」の問題など、地域社会の維持装置の解明というより一般的な問題へと広く展開しうる可能性を秘める成果として、高く評価された。

社会連携賞授賞活動

◆境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）

「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」

境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）が実施する「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」は、第一に、我が国のボーダースタディーズ（境界研究）を通じて教育・研究機関のみならず、自治体、公益法人、NPOなど多様な境界域のステークホルダーを包摂する活動であること、第二に、地域研究の醍醐味であるフィールドワークや国際会議およびセミナーなどによる研究や「学び」とボーダーツーリズムなど地方活性化につながる社会実践とを見事に結びつけていること、第三に、地域を越えた共通課題を共有しつつ、国際的にも開かれた活動によって我が国の地域研究の地域横断的、国際的展開を行っていること、などにおいて、高く評価できる。これらの点に鑑みて、同活動は、社会連携賞の授賞対象としてふさわしいものと判断される。

境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）の活動を受賞対象とすることは審査委員が総じて同意するところではあったが、それは過去の実績への評価とともに、ボーダースタディーズを通じた境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）の今後の持続的展開、新たな挑戦への期待が受賞理由に込められていることも付言しておきたい。

Japan International Border Studies Network
http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/

2015年11月1日
地域研究コンソーシアム賞審査委員会
委員長：堀江 典生
委員：遅野井 茂雄、山田 孝子、門司 和彦、中村 尚司

受賞者紹介（研究作品賞）

『納豆の起源』

横山 智

略歴

名古屋大学大学院環境学研究科教授。博士（理学）。筑波大学大学院地球科学研究科地理学・水文学専攻中退。熊本大学文学部助教授（准教授）を経て現職。専門分野は地理学。特にラオス農山村部における森林利用や生業などの調査から、自然と人間活動の関係性を捉える研究に取り組む。大豆発酵食品の研究もライフワークとして実施。著作に『Integrated Studies of Social and Natural Environmental Transition in Laos』（共編著、Springer、2014年）、『資源と生業の地理学』（編著、海青社、2013年）、『モンスーンアジアのフードと風土』（共編著、明石書店、2012年）、『ラオス農山村地域研究』（共編著、めこん、2008年）がある。

受賞者からの一言

この度は、地域研究コンソーシアム賞・研究作品賞という思いがけない栄誉を頂きありがとうございました。これまでご指導下さいました先生、同僚の皆様方、そして私のフィールドワークにご協力頂いた数多くの方々には感謝の気持ちで一杯です。

私の専門は地理学です。ラオス農山村で土地利用や生業変化の研究を約20年間実施しています。そのような私がなぜ納豆の研究に携わることになったのか、簡単にお話ししたいと思います。

はじめて私が海外で「納豆」と出会ったのは2000年、調査帰りに立ち寄ったラオス北部のルアンパバーンという世界遺産の町でした。その納豆は「トゥアナオ」、直訳すると「腐った豆」というもので、あまり美味しくありませんでした。味はともかく、文献でしか知らなかった照葉樹林文化の一文化要素とされる東南アジアの納豆を食べたことは、自分の中では感動的な出来事でした。

それ以降、調査で訪れた地の市場に出かけては、納豆を探すことが趣味のようになりました。2007年からラオスで納豆を生産している家を訪ねる調査を始めたのですが、そこで見た納豆のつくり方は、菌の供給源となるものを何も入れず、茹でた大豆を肥料袋のようなプラスチック・バックに入れて、3日ぐらい置くだけでした。出来上がったものは、味は納豆っぽいのですが、糸引きは全くありません。そこで、ラオスの「トゥアナオ」は納豆なのか？他の地域の納豆はどうなのか？という疑問が生じ、東南アジアの納豆研究を本格的に始めることになりました。

今から考えると、私に微生物学の知識が全くなかったから、納豆の研究を始めるに至ったのだと思います。少しでも微生物学の知識があれば、納豆をつくる枯草菌（Bacillus族の菌）には様々な種類があり、糸を引かせる種類の菌もあればそうでない種類の菌もあることは、すぐに分かったはずです。そして、それ以上追求しようとは思わなかったかもしれません。

その後、タイの調査では、チークやフタバガキ科の葉を使って煮豆を発酵させた納豆にわずかな糸引きがあることを知り、さらにミャンマーのカチン州でイチジクの葉に煮豆を包んで発酵させた納豆が日本と全く同じように強い糸引きがあることを発見し、菌の供給源となる植物に着目すると地域ごとの納豆の違いが明らかにできるのではないかと思うようになりました。そして、従来から納豆があると言われていたインド北東部やネパールなどのヒマラヤ地域にも足を延ばして納豆を探しました。最終的に、2014年までに照葉樹林地域63地点を調査しました。

納豆の起源については、今から40年以上前に中尾佐助先生が『料理の起源』（NHKブックス）で「納豆の大三角形」仮説という雲南一元説を提示した後、いくつかの説が出されましたが、この20年ほど全く議論が進んでいませんでした。そうした状況において、フィールドワークを通して多くの納豆を見てきた私が今回提示したのが、生産者の植物利用から見た「納豆の発展段階論」から導き出した納豆の起源仮説です。この仮説は、いずれ覆されることになるかもしれません。しかし、誰かが新しい仮説を提示しなければ、議論は先に進みません。今後、私の起源論を批判的に検討して、新しい仮説を提示してもらえればと思っています。加えて、拙書ではフィールドワーカーが現場で何を見て、そしてどう感じ、それを次の調査にどのように結びつけていくのか、その臨場感を一般読者にも伝えられるように構成しました。拙書を読んだ若者が一人でも多く、この研究をきっかけにフィールドワークに興味を持ち、将来の地域研究を担ってもらう人材に育って頂きたいと思っています。

最後になりますが、納豆を探し出すフィールドワークは、今後も続けて行きたいと思っています。また何年後かに、新しい知見を皆様に提供できるように、この受賞を励みとしてより一層研究に邁進して行きたいと思っています。今後とも、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

受賞者紹介（登竜賞）

『フェアトレードの人類学―ラオス南部ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合』

箕曲 在弘

略歴

東洋大学社会学部社会文化システム学科専任講師。博士（文学）。専門は文化人類学、東南アジア地域研究。早稲田大学第一文学部卒業後、同大学院文学研究科博士課程修了。ラオス情報文化省調査員、明治学院大学社会学部付属研究所研究調査員、東洋大学社会学部助教を経て、2015 年より現職。ラオス南部のコーヒー栽培農村において、フェアトレードの生産者に対する影響について、協同組合、仲買人、村落政治機構に注目してフィールドワークを行っている。

受賞者からの一言

このたびは、「第5回地域研究コンソーシアム賞登竜賞」という素晴らしい賞をいただきまして、誠にありがとうございます。まずは、選考委員の先生方に深く感謝申し上げます。また、本書のもとになった博士論文の草稿を読んで指導してくださった指導教員の西村正雄先生、並びに博士論文の副査を務めてくださった各先生方に深くお礼申し上げます。

拙著の対象としたラオス人民民主共和国は、私が学部2年生のころに開催されたスタディーツアーに参加したのがきっかけで、それ以来、幾度となく訪れることとなりました。ラオスといえば、もち米が有名で、水田の広がるのどかな国という印象がありますが、ある時、私は南部の高原地帯でコーヒーを栽培していることを知ります。

コーヒーは、世界第2位の貿易産品で、植民地主義や南北問題、そして発展途上国の貧困問題と密接に結びついた農産物として知られています。当初は、タイをフィールドに人類学的調査をしようとしていたものの、私は、このラオスで一見、細々と生産されているコーヒーに興味を覚え、博士課程に入りラオス語を学び、コーヒーの産地に入り込むことにしたのです。その過程で知ったのが「フェアトレード」でした。

わたしはその後、「フェアトレード」が社会運動であると同時に、国際開発の分野で新たな貧困削減のための手法として注目されていることを学びました。しかし、当時、この仕組みが実際にどの程度、成果を上げているのかを実証的に研究した文献がほとんどないことにも気づきました。それならば文化人類学の手法を使って、自分で調査してみようと思い、その後、拙著に通じる研究となりました。

さて、この研究の特徴は大きく分けて2つあります。ひとつは詳細な家計調査を行ったという点、もうひとつは生産協同組合への参与観察に基づいて、詳細に人間観察を行って、人びとの権力関係を描いた点です。前者の家計調査データの収集は、涙なしでは語れないほど、困難を極めました。そもそも自分の耕している土地の面積や収穫量などを記録していない農家の方々から、こういったデータを取得するのは、一筋縄ではいきません。さまざまな工夫をしながら、少しずつ手ごたえを感じるようになり、約140世帯の家計調査を終えるまでに6か月ほどを費やしました。

いずれにせよ、家計調査では細かい作業が苦手な農家の方々と、できるだけ正確なデータを取りたい私との間のせめぎ合いが続き、相手に不快な思いさせないように、食事や酒の席に呼ばれれば必ず行って、信頼関係を築く。こういった配慮が、良質なデータを取得するための隠れた営みになると、今では実感しています。

この研究を通じて私が訴えたいことはいくつかありますが、その中でも、とくに記しておきたいのは、細かなデータ、とくに数字を追いかけることによって、初めて見えてくる現実があるということです。現象を観察するのは文化人類学者にとって必要不可欠な仕事でありますが、それだけでなく、ひとつひとつのデータを積み上げ、まとめていくことによって、はじめて説得力のある議論が可能になる。そう信じて、研究してきました。本書は約480ページもあり、通読するのは容易ではないと思いますが、現象の背後にある人びとの生活の技法を、緻密なデータをもとに説明することで、フェアトレードの影響ははじめて立体的に見えてくるのだと考えます。

拙著のもととなった博士論文の審査をしていただいた先生方からは、まだ不十分な点をいくつか指摘されています。たとえば、村落の権威のあり方については、いまだにそのメカニズムが理解しづらく、どのような権力が作用しあっているのかを解明していく必要があります。一方、農村社会の仲買人は、インフォーマル経済のあり方を明らかにするうえで大変重要であり、より深く調査していきたいと考えております。今後は、そういった不十分な点を埋めていく作業をしていくと同時に、資本主義やグローバルな経済活動の下で生きる「小さな民」に寄り添いながら、わたしたちの生活のあり方について考え直すことのできるスケールの大きな研究をしていきたいと望んでおります。

受賞者紹介（登竜賞）

『四川チベットの宗教と地域社会―宗教復興後を生きぬくボン教徒の人類学的研究』

小西 賢吾

略歴

金沢星稜大学教養教育部専任講師。博士（人間・環境学）。専門は文化人類学。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程研究指導認定退学。日本学術振興会特別研究員 PD、大谷大学・関西学院大学・神戸女学院大学非常勤講師、京都大学こころの未来研究センター研究員等を経て 2015 年より現職。チベット社会（特に中国四川省）と日本をフィールドに、集団的な宗教実践と地域社会の共同性がいかに連関するのかを研究している。チベットのボン教徒に関する民族誌的研究のほか、石川県能登地域の活性化に向けた研究にも従事。

受賞者からの一言

この度は、栄えある地域研究コンソーシアム賞登竜賞をいただき、誠に光栄に存じます。審査委員の先生方をはじめ、これまでお世話になったすべての先生方、同僚のみなさま、調査でご協力いただいたみなさまに心からお礼を申し上げます。

私は本書の「まえがき」で、フィールドワークを行ったシャルコク地方(中国四川省)との出会いをエッセイ風に書きました。地域研究者が対象地域と出会うきっかけには様々なものがあると思いますが、はじめからお膳立てがなされているケースはむしろ少なく、多くが偶然の出会いに左右されるのではないかと想像しています。私もまた、この地域との偶然の出会いから、様々な方に支えられて、ようやく拙いながらもその成果を形にできました。振り返ってみれば、本書は地域をめぐる多様で広大な人のつながりの網の目から立ち上がってきたと感じています。

本書は、中国西部の急激な社会変動を背景に、「宗教復興後」の時代における宗教と共同性の問題を、僧院を中心とする地域社会の宗教実践の場から考察するものです。チベットの人びとのグローバルな移動のレベルから、瞑想や供養塔の建設といった個々の実践における身体や感情のレベルまで、かなり欲張りに議論を展開しています。地域社会が社会主義的近代化や改革開放をへて再編される中にあって、宗教はなぜ人びとに対するある種の「説得力」を保持しているのか。それを、秘儀的なレベルではなく、僧院をぐるぐると巡拝しマントラをもごもごと唱え続けるような、多くの人びとが共感できる実践から描こうと心がけてきました。その中で、筆者自身もまた、ボン教を通じて実践の場としての地域に巻き込まれていきました。インド、フランス、中国をまたいだボン教高僧の著作集の出版事業のお手伝いができたことは忘れがたい思い出です。

本書のもとになった調査は、人類学的な方法を用いたものではありますが、それだけではとても本書を完成させることはできませんでした。チベットの宗教は膨大なテクストの蓄積を有するため、地域史や儀礼等の記述には、これまで国内外で構築してきた仏教学、歴史学、言語学等の研究者とのネットワークが不可欠でした。こうした学際的な姿勢は、私の出身の京都大学総合人間学部と大学院人間・環境学研究科が掲げてきたものでもあり、そこで育つ中で少しずつ自然と身につけてきたように思います。また、京都大学地域研究統合情報センターや国立民族学博物館の共同研究プロジェクトに参加させていただき、地域間比較を軸の一つにした綿密な議論を通じて研究を鍛えていただいたことは、貴重な糧になりました。こうした経験をもとにして、今後も地域を核として諸分野を横断する知の営みとしての地域研究の発展に、微力ながら貢献できればと思っております。

講評にもありましたように、本研究にはまだまだ不足点や課題も多く残っています。ボン教や個別地域だけにこだわるのではなく、他宗派にも目を向けた議論が必要だという指摘はまさにその通りです。ただ、ボン教に着目することは、これまでチベット仏教とそれに基づくチベット・モンゴル・中国・インド等の関係を軸にして語られてきた地域理解の図式を相対化し、東アジアと南アジアをつなぐ新たな視座を構築する意義があるとも考えています。また、中国のマクロな政治経済の動態と本書の内容を結びつけた議論の必要性は、非常に大きな課題として残されています。今後も粘り強く研究を続ける中で、一つひとつ解決していきたいと考えております。

こうした展望を持ちながら、フィールドで出会った一つひとつの事象を、丹念に拾い上げる仕事を続けていきたいと思っています。本書は京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士論文をもとにしていますが、それが生み出される場となった指導教員の山田孝子先生のゼミでは、大きく2つのことを学んだと思っています。それは、データにとことん誠実であること、そして、50年後に読んでも意味のある仕事をするということでした。本書がそれに応えられたかどうか心許ないところもありますが、授賞を叱咤激励として、これからも研究に邁進する所存です。本当にありがとうございました。

受賞者紹介（社会連携賞）

境界地域研究ネットワークJAPAN「境界地域を結ぶ『公・学・民』の研究・実務連携と社会貢献」

長谷川 俊輔

略歴

北海道根室市長／境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）代表幹事。1945 年北海道根室市出身。根室市職員を経て、平成 10 年・根室市収入役、平成 14 年・根室市助役をそれぞれ歴任し、平成 18 年より根室市長就任（現在、3 期目）。北海道大学の岩下教授の呼びかけによって平成 19 年に旗揚げされた「国境フォーラム」に当初から参加し、平成 27 年 4 月より JIBSN の第 3 代代表幹事に就任、現在に至る。

受賞者からの一言

この度は、「境界地域研究ネットワークJAPAN（JIBSN）」の活動にご理解を賜り、「地域研究コンソーシアム賞・社会連携賞」という素晴しい賞をいただき、心から感謝とお礼を申し上げます。

私どもJIBSNは、岩下明裕・北海道大学教授の呼びかけにより、2007年、国境を抱えるまちである「与那国」、「小笠原」、「対馬」と、北方領土問題を抱える「根室」の４つの自治体が集まり、境界地域として、それぞれが持つ課題や取り組み、また、将来のあるべき姿等について情報を交換しながら地域の発展につなげていくことを目的に「国境フォーラム」が設立されたことから始まっております。

その後4年間にわたり、それぞれの自治体持ち回りによって、地元住民を巻き込んだ「フォーラム」を開催してきたところでありますが、この取り組みをさらに発展させ、自治体はもとより、実務者や研究者など多くの関係者によるネットワークを構築し、より専門的、かつ広範な情報交換の場をつくるべきとの考え方によって、2011年11月、「国境フォーラム」を発展的に解消し、現在のJIBSNが誕生しました。

JIBSNは現在5年目を迎え、全国から多くの地方公共団体、研究･教育機関、関係団体などの賛同をいただき、毎年、国境・境界地域におけるセミナーの開催や、国境を越える「モニターツアー」の実施など、地域住民とともに、様々な取り組みを進めてまいりました。

これらの活動が、この度の「地域研究コンソーシアム賞・社会連携賞」という素晴しい賞につながったものと考えており、大変に嬉しく感じておりますとともに、これまでJIBSNを牽引してこられました、初代代表幹事の外間守吉・与那国町長、第2代代表幹事の財部能成・対馬市長、そして現在は企画部会長としてJIBSNの船頭役を担っていただいております岩下明裕・北海道大学／九州大学教授をはじめ、実際に活動されているJIBSNのメンバーに対し、心から感謝を申し上げたいと思います。 JIBSNは、まだまだ駆け出しで、今後もさらに発展させていかなければならないと考えておりますので、引き続き、関係皆様のご理解とご協力、さらに、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願いを申し上げます。 最後に、JIBSNの活動に対して過分なる評価をいただき、このような素晴しい賞を与えてくださいました審査委員の皆様、さらに、地域研究コンソーシアムの関係者の皆様に重ねて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

■ JCAS賞の募集

地域研究コンソーシアム（JCAS）は、「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とし、その実現のために、1) 共同研究の企画・実施・支援、2) 海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、3) 研究成果の国内外への発信・出版、4) 地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。これらの目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績や共同研究企画、そして社会連携活動を広く顕彰するためにJCAS賞は設けられています。JCAS賞では、研究作品賞、登竜賞、研究企画賞、社会連携賞の4つの部門において、いずれも自薦他薦を問わず、みなさまからの積極的な応募をお待ちしております。詳しくはホームページ等でご確認ください。

JIBSN 境界地域研究ネットワークJAPAN
JAPAN INTERNATIONAL BORDER STUDIES NETWORK

境界地域研究ネットワークJAPANの活動

古川 浩司
境界地域研究ネットワークJAPAN 副代表代行

境界地域研究ネットワークJAPAN（Japan International Border Studies Network：JIBSN）は、2011年11月に設立された研究者と実務者のネットワークを通じて境界地域の声をわが国の諸政策に反映させることを目指している組織です。JIBSNには、2016年1月現在、日本の8地方自治体（稚内市、根室市、小笠原村、隠岐の島町、対馬市、五島市、竹富町、与那国町）、7教育・研究機関（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット、東海大学海洋学部海洋文明学科、中京大学社会科学研究所、九州大学韓国研究センター、沖縄大学地域研究所、公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター、公益財団法人環日本海経済研究所）、2 NPO法人（アジアクラブ、国境地域研究センター）[計17団体]が加盟しています。

JIBSNの活動は、主に①セミナーを通じた情報交換、②シンポジウムやレポートなどを通じた情報発信、③境界地域の自治体におけるインターンシップを通じた研究者の育成、④図書館支援などに大別されます。このうち、①の情報交換に関しては、2012年8月に稚内市とユジノサハリンスク市（ロシア）、2013年10月に五島市、2014年11月に竹富町でセミナーを開催し、境界地域の漁業問題や国境観光（ボーダーツーリズム）などをテーマに各地の取組状況を紹介し合いました。これらの情報は②に関連しますが、シンポジウムやJIBSNレポートを通じて発信しています（http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/report.html）。また、③に関しては、2013年度以降に根室市役所や与那国町役場に若手研究者を派遣して「理論と実務の両立」を図っています（この成果は『「見えない壁」に阻まれて』（北海道大学出版会、2015年）にまとめられています）。そして④に関しては、北海道大学／九州大学教授の岩下明裕氏（現JIBSN企画部会長）が第6回大佛次郎論壇賞（2006年：朝日新聞社）で獲得した賞金をもとに、日本の境界地域におけるボーダー・リテラシーを高めるべく「エトピリカ文庫」という書籍コーナーを、根室市（北方四島交流センター）、札幌市（北海道大学総合博物館）、対馬市（つしま図書館）、与那国町（複合型公共施設）、小笠原村（母島村民会館）に設置しています。この他、加盟自治体を紡ぐために各地のマラソン大会にも参加しています。

国境マラソンIN対馬に参加したJIBSN関係者（2013年7月）

これらの活動の結果、対馬や稚内などで具体化された「ボーダーツーリズム」は『現代用語の基礎知識2016』に登場しています。

なお、2016年は2月に根室市でセミナーを開催しましたが、10月にも東京でセミナーを開催する予定ですので、ぜひ皆様ご参加ください。

http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/index.html

公開シンポジウム

境界・境域への挑戦と『地域』

2015年度地域研究コンソーシアムの一般公開シンポジウム「境界・境域への挑戦と『地域』」は、11月１日（日）に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された。参加者数は90名超であった。当日の報告と討論の内容を紹介する。

いま、国境・境界・境域を考えること

黒木 英充
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

何十年か先の将来に人が2015年という年をふり返る時、シリアの内戦の激化、難民問題の拡大、イスラームを掲げるジハード主義者の暴力の拡散により、ヨーロッパ地域が直接の影響を受け、世界全体が多極的混乱の渦に巻き込まれ始めた年、と位置づけるかもしれない。

「イスラム国」（IS）はすでに前年にイラク・シリアの国境検問所を爆破して、100年前にイギリスとフランスが引いた境界線の消滅を宣言し、実際にその支配領域はユーフラテス川とその支流の流域にまたがる形で、国境を無意味化していた。シリアもイラクも世界の多くの国々に大使館を置き、国連に代表を出しているものの、地図上の国境線によって囲まれた領域に対する全面的な主権を失っていた（シリアは1967年から半世紀にわたってゴラン高原をイスラエルに占領されたままで、その主権を行使できないでいたが）。内戦状態に陥って4年余りが経過したシリアでは、本来の住居を追われた国内外の難民・避難民が1000万人以上で人口の半数と推定されるに至り、イラク国境

以外も試練にさらされることとなった。特にトルコ国境付近におけるクルド人勢力とISとの戦闘が熾烈を極め、その国境を通じての人(難民はもちろん戦闘員も)・武器・物資・カネの移動に注目が集まった。2015年はISの活動におけるトルコの従来の役割がようやく明らかにされた年でもあった。内戦でシリアの国土は四分五裂したうえに虫食い状に無数の諸勢力が割拠する形となり、都市内部や街道筋に無数のチェックポイントが設けられて膨大な数の境界線が生じていた。レバノン国境、イスラエル支配下のゴラン高原との境界線、ヨルダン国境のいずれもが、シリア政府軍と反体制派武装勢力との戦闘の影響を受け、(詳細は省くが)それら周辺国自体の変容ぶりも明らかになった。

2015年夏は、難民問題がヨーロッパ諸国にとって待ったなしの問題として立ち現われたときでもあった。エーゲ海や地中海をボートで渡る人々、海岸に打ち上げられる人々、ドナウ河岸の葦の茂みの中で命を落とす人々、セルビアからハンガリーへ国境のフェンスを突破する人々、ブダペスト駅構内で野宿する人々、整然と無言で満員の移送列車に乗り込む人々・・・堰を切ったように溢れ、スマートフォンを手に移動する人々の群れには、シリアだけでなく、イラクやアフガニスタンなどから流れ出てきた人々も加わっていた。その意味で難民の大移動は、2001年の9/11事件後のアメリカの戦争が起こしたこの地域の混乱の帰結でもあった。破綻した国家で将来に希望を見出せない人々は、余力がある限り、国境をいくつも越えゆくのである。

2015年1月と11月の2度にわたってパリで起こったIS共鳴分子による襲撃事件は、フランスを「対テロ戦争」に本格参戦させることとなった。特に後者の事件は、同

年夏のトルコのエーゲ海岸に打ち上げられた幼児の写真が巻き起こした、難民支援を人道的観点から強化すべしとの声を、一瞬にしてかき消すまでの力をもった。EUの国境管理の厳格化が叫ばれ、2016年に入ると、難民が虎の子として持ち出して最後に残ったなけなしの財産を没収する法律がデンマークで制定されるに至る。

軍事的にも、2015年はNATO加盟国たるトルコがロシアの戦闘機を撃墜するという衝撃的な事件が発生した年でもあった。トルコ側は撃墜の理由として、シリア政府側に立って参戦中のロシア軍機による数度のトルコ領空侵犯を挙げた。しかしそれがあくまでも表向きの理由であることは、たとえ侵犯したとしてもシリア側に突き出た部分のごくわずかの時間の通過であったことと、撃墜地点がシリア領内であったことから明らかである。実際には、地上においてトルコが支援するトルクメン系反政府民兵集団が、他のイスラーム主義的民兵集団と共に

ロシア軍に攻撃を受けていたことに対する報復が理由であった。シリアの上空では米ロ英仏の戦闘機が飛び交い、地上ではシリア政府軍とシリア人の反政府勢力だけでなく、チュニジアやサウジアラビアなどほぼすべてのアラブ諸国、トルコ、欧米諸国、ロシアやコーカサス諸国、インドネシアやマレーシア、パキスタン、中国の新疆ウイグル地方などからの「義勇兵」が反政府側として戦い、レバノンのヒズブッラーがイランの協力を得ながらこれに対峙する、という図式になっていたが、2016年にはサウジアラビアがトルコとの従来の反体制派への軍事的支援の協力関係をさらに進めて共同地上軍派遣を検討するまでになっている。IS掃討というのは建前にすぎず、シリアでISと戦うクルド人勢力を攻撃し、イスラーム主義的民兵を支援してアサド政権を軍事的に打倒するのが本来の目的であることは、疑いを容れない。一方でサウジアラビアはイエメンの内戦に介入し、空軍のみならず地上軍も派遣している。

こうして、2001年にアフガニスタンで始まったアメリカによる「対テロ戦争」は、その手を離れてコントロールが効かなくなりつつあり、それが国境・境界・境域という空間指標において様々な形で表出しているのである。

いま世界で最も多くの人命が日々失われ、最も多くの国々が関与している戦争は、当然ながら地域研究にとって取り組まねばならない重要課題の一つであり、そこで前面に現れている「（国境を含めた）境界・境域」の問題を、より大きな地域的広がりの中に引き戻し、それぞれの時間的な射程距離の中で考えることによって、現在、そして未来に世界各地で起こり得る諸問題に向き合う際の手がかりを得られるのではないか――こうした問題関心のもと、2015年度のJCAS年次集会シンポジウムを企画した次第である（上で述べたことの中には企画時点よりも後に起こったことも含まれるが、問題がより深まる形で顕在化したというべきであろう）。

企画に当たっては、中東地域の研究者だけではなく、国境や境界・境域が先鋭な問題として立ち現われている諸地域の第一線の研究者にも加わって頂くこととした。こうして、報告順に、アラビア半島からIS支配領域にまで及ぶ地域を研究対象としておられる保坂修司氏、パレスチナ難民問題が専門の錦田愛子氏、ロシア・ウクライナから黒海・コーカサス地域までを政治学的に分析しておられる松里公孝氏、中部アフリカを中心に日本のアフリカ研究を牽引しておられる武内進一氏、東南アジアのイスラームと海域世界の人類学が専門の床呂郁哉氏に報告を頂いた。また移民・難民問題に実務者として取り組んでおられる清谷典子氏をJCAS運営委員会から推薦頂き、かねてより境界研究をGCOEプロジェクトとして大規模に組織され、「境界地域研究ネットワークJAPAN」を立ち上げられた岩下明裕氏とともにコメンテータとしてご参加頂いた。

報告・コメントを通じて実に刺激的で多種多様な問題が明らかになった。

詳しくは各報告・コメント内容をご覧頂きたいが、

・非国家アクターのもつ領域観念とその実践がもたらす境界と国境とのズレを国家の側がどのように問題と見なして対処しようとするのか、あるいはそれを利用しようとするのか

・国境を越える移民・難民が国家をつくることによって

プログラム

■開会挨拶

■趣旨説明・司会

黒木 英充/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）

■発表・報告

報告1　まっすぐな国境線―アラビアのロレンスとイスラム国

保坂 修司/日本エネルギー経済研究所

報告2　見えない境界をめぐるパレスチナとイスラエルの攻防
―国家承認、エルサレム、和平分割案

錦田 愛子/東京外国語大学AA研

報告3　ボーダーを堅牢化しない紛争
―ウクライナほか環黒海地域の経験から

松里 公孝/東京大学大学院法学政治学研究科

報告4　アフリカの国境は紛争の主因か？

武内 進一/JETROアジア経済研究所

報告5　ボーダーの形成と越境のダイナミクス
―東南アジア海域世界の事例から

床呂 郁哉/東京外国語大学AA研

■コメント

清谷 典子/国際移住機関（IOM）駐日事務所

岩下 明裕/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

移民・難民をつくりだすというパラドクス、その過程を表現する言説のあり方

・「恣意的」であるとされる国境線が問題なのか、線そのものではなく、それによって生まれた国家の内実が問題なのでは

といった論点が特に興味深く思えた。

今後も国境・境界・境域をめぐる問題は世界各地で多々生じるであろうが、そこで地域研究者が果たすであろう学的・実践的な貢献の大きさが、本シンポジウムを通じて実感できた。

90人を超える参加を得て質問も多く出されたが、時間の関係でいくつかに対応できなかったのは司会の不手際であり、御寛恕を願いたい。

報告者・コメンテータとJCAS運営委員会・事務局のみなさま、シンポジウム実施に当たって尽力された東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の同僚諸氏に厚く御礼申し上げる次第である。

JCASコンソーシアム・ウィーク
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所蔵資料特別展示会「**アジア諸文字のタイプライター**」**見学ツアー**の様子（2015.11.01）

JCASオンデマンドセミナー「東南アジア研究とその手法について学ぶ」

高校生からの地域研究
――地域立脚型グローバル人材の育成をめざして

西 芳実
京都大学地域研究統合情報センター

2015 年 8 月 4 日、文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校である福岡県立鞍手高等学校の普通科人間文化コース 2 年生 40 名の「課題研究」の一環として JCAS オンデマンドセミナー「東南アジア研究とその手法について学ぶ」が京都大学稲盛財団記念館で実施された。同コースではシンガポールとマレーシアを対象とした人口、資源・エネルギー、労働、地域活性化の四つの課題研究に取り組んでおり、資料調査と現地での聞き取り調査を踏まえた研究論文の執筆をめざしている。セミナーでは資料調査や現地調査を始める前の事前研修として、「地域を読み解く目を鍛える」をキーコンセプトに、二つの講義（講義 1「スマトラ大津波が繋いだ世界――地域から世界を見る目を鍛える」、講義 2「映像から読み解く東南アジア――マレーシア・シンガポール」）を行い、講義にもとづいて京都大学東南アジア研究所図書室で研修を行った。

同高校が位置する北九州筑豊地域は、福岡市と北九州市の両大都市と近接しているものの、石炭産業の衰退後、人口減少や少子高齢化などの地域課題に直面している。都市国家シンガポールに隣接するマレーシアのジョホールバル地区の大規模開発計画「イスカンダル計画」に取り組むシンガポールとマレーシアが課題研究の対象とされた背景には、近接する大都市とともに地域の持続可能な発展をいかにして実現するかという筑豊地域が抱える課題がある。同高校の SGH としての取り組みには、地域の課題を解決する手掛かりを世界に探ることができる地域立脚型グローバル人材を育成することが強く期待されている。

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

http://www.sghc.jp/

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

大東文化大学大学院 アジア地域研究科

アジア地域研究科委員長　鹿 錫俊

アジア地域は中国やインドをはじめとする諸国の著しい発展によって、注目を浴びています。他方で、アジア地域は貧困問題、環境問題、宗教対立問題、歴史認識問題および日中関係、日韓関係などを象徴とする諸問題の複雑さによって、研究の焦点ともなっています。

これを背景に 1999 年に誕生した本研究科は、「ヨーロッパ中心的な観点を改めて、アジア人の立場からアジアを見ること」、「アジア研究を通じて豊かな国際感覚をそなえた人材を育成すること」を理念としています。専任教員による指導陣の多くは、長期間の現地滞在の経験を持つ専門家で、アジアの諸問題をめぐって発表した論文と著書は学界で評価されています。

このような教員陣のもとで、本研究科は、アジア諸地域に共通する問題に関する理解と洞察力を深め、国際的な広い視野に立脚した研究能力及び専門的な職業能力を有する人材の養成を目指しています。

この目標を達成するために、博士課程前期課程と後期課程を持つ本研究科は、以下のような学問体系を設けています。

（1）社会科学分野

①「政治研究コース」：国際政治体制の枠組みの変化とアジア諸国の国民統合との関係、アジアにおける政党制と民主主義の発展などを研究。

②「経済研究コース」：アジア諸国の開発戦略と国際経済との相互関係などを研究。

③「社会研究コース」：伝統社会の構造、政治経済のグローバル化が伝統規範に与える影響などを研究。

（2）人文科学分野

①「歴史研究コース」：アジア諸地域の歴史の内的発展と西洋文明との接触や相互交渉などを研究。

②「文化研究コース」：思想・宗教・文学・言語などを通してアジア文化の土着性と普遍性を研究。

③「芸術研究コース」：アジアの伝統芸術の伝承と変容などを研究。

本研究科の講義や演習には、「東アジアの国際政治研究」「中国の産業連関分析」「国際強制移動とグローバル・ガバナンス」「中東におけるイスラーム主義の思想と運動」「植民地朝鮮の教育研究」「現代ヒンディー文学研究」「アジアと中世ヨーロッパ芸術の比較」「地域調査方法論」「国際関係論」といった多彩な科目が並んでいます。学生たちは、コースの枠を超えて科目を履修できるとともに、研究テーマに即した指導教員の下で、専門分野に関する研究を深め、論文にまとめていきます。

アジア地域への理解を深め、実証的な研究を実現することを求めて、本研究科では院生のフィールドワークを奨励し、できる限りの支援に尽力しています。毎年、2～8名の学生が大学からフィールドワーク奨学金を受けて、アジアの関係地域でフィールドワークを行い、その成果を学位論文に活かしています。

教員と学生の研究成果の発表の場として、本研究科は創立の翌年から毎年『大東アジア学論集』を発行し、論文をはじめ、書評、研究ノート、調査報告、学位論文の要旨などを掲載しています。また、学生の視野を広めるために、本研究科は 2013 年に「台頭する中国とアジアの新秩序」と題する国際シンポジウム、2015 年に「南アジアにおける社会的な運動と文化変容――周辺の社会経済の展望から」と題する国際シンポジウムを開催し、国際学術交流に力を注いでいます。

今後、本研究科は地域研究コンソーシアム (JCAS) への加盟を契機に、各加盟組織との協力を強めつつ、アジア地域に関する教育と研究をいっそう推進していきたいです。ご支援、宜しくお願いします。

http://www.daito.ac.jp/gakuin/asia/

Graduate School of Daito Bunka University Department of Asian Area Studies

『地域研究』第16巻第1号・2号 が刊行されます。

『地域研究』第16巻 第1号

［巻頭言］ダーイシュの戦略転換／臼杵 陽

［総特集］ロシアとヨーロッパの狭間（はざま）——ウクライナ問題と地域史から考える

［総特集にあたって］ロシアとヨーロッパ——狭間の地域研究／福田 宏

［座談会］地域と地域の間を読み解くために／岩下 明裕・遠藤 乾・川島 真・林 忠行・福田 宏（司会）

［第Ⅰ部］ウクライナをみる視角

［第Ⅰ部にあたって］移ろうマイダンの風景とウクライナ危機／服部 倫卓

◇ ウクライナの求心的多頭競合体制／大串 敦

◇ ウクライナの国民形成とサッカー／服部 倫卓

◇ ウクライナ危機をめぐる二重の相互不信／溝口 修平

◇ リトアニアからみたウクライナ問題／重松 尚

［第Ⅱ部］両大戦間期の中央ヨーロッパ

［第Ⅱ部にあたって］「危機の時代」における東と西の狭間／福田 宏

◇ パン・ヨーロッパとファシズム——クーデンホーフ＝カレルギーとヨーロッパの境界／福田 宏

◇ ヴァイマル期ドイツにおける「西洋」概念の政治化——ヘルマン・プラッツと雑誌『アーベントラント』／板橋 拓己

◇ ロカルノ体制批判とハンガリー地理学——テレキ・パールの「ヨーロッパ」論から／辻河 典子

◇「大フィンランドは祖国と同様である」——エルモ・カイラとカレリア学徒会の地域構想／石野 裕子

◇ 戦間期ポーランドのマイノリティと居住地——アポリナルィ・ハルトグラスの在留型シオニズム／宮崎 悠

［論文］▷ ミャンマー中央乾燥地域における農村労働力流出の決定要因——ニャンウー県一農村調査より／水野 敦子

▷ 現代ロシアにおける民族運動のなかの「民族文化」表象とその限界——クリャシェン（受洗タタール）の「民族的祭り」を事例に／櫻間 瑛

［書評］第4回（2014年度）地域研究コンソーシアム賞受賞作品書評

［論評］『地域研究』14巻2号　特集へのコメント
　　『地域研究』15巻1号　特集へのコメント

ISSN 1349-5038／ISBN 978-4-8122-1519-7
A5判　272頁　2015年11月刊行　定価 本体2,400円＋税

『地域研究』に関する問い合わせ先　刊行担当（事務）
journal@cias.kyoto-u.ac.jp

『地域研究』第16巻 第2号

［巻頭言］パリ同時多発テロ事件と地域研究者／臼杵 陽

［総特集］中ロの台頭と欧米覇権の将来

［総特集にあたって］戦後の国際秩序の転換——先進諸国から新興経済圏へ／塩谷 昌史

［座談会］国際秩序を変えようとする中国とロシア／大坪祐介・加々美光行・林幸秀・細谷雄一・塩谷昌史（司会）

［第Ⅰ部］マネー——ドル基軸通貨体制の黄昏

◇ブレトンウッズ体制とIMFの変容——史的展開と現局面／西川 輝

◇ 中国の金融改革と対外通貨戦略／露口 洋介

◇ 国際原油価格とロシア経済の関係について／安木新一郎

◇ ブレトンウッズ体制と「知識」——シエラレオネ内戦の研究を事例として／岡野 英之

［第Ⅱ部］安全保障と資源の確保——米国の後退と中ロの台頭

◇ 安全保障政策の転換——世界各国の動向／岩田 英子

◇ 核兵器の再登場——ロシアの核政策と変化する欧州安全保障／岡田 美保

◇ 中国とアフリカ——中国の対アフリカ政策と経済進出／尹 曼琳

［第Ⅲ部］国力としての科学技術——ノーベル賞を視野に入れる中国

◇ 中国の科学技術の歴史と現状／周 少丹

◇ ロシアの科学技術情勢——資源大国からの脱皮を模索して／津田 憂子

◇ 電子戦について——防衛科学技術としてみた電子戦技術とその研究開発動向に関する一考察／小林 正明

［論文］▷ 地域情報学の読み解き——発見のツールとしての時空間表示とテキスト分析／柳澤 雅之・高田 百合奈・山田 太造

第5回（2015年度）地域研究コンソーシアム賞受賞者発表

ISSN 1349-5038／ISBN978-4-8122-1549-4
A5判　320頁　2016年3月刊行　定価 本体2,400円＋税

地域研究コンソーシアム・ニューズレター No.19
発　行：2016年2月
編　集：地域研究コンソーシアム広報部会
NL担当：柳澤 雅之　　編集協力：川島 淳子
発　行：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学地域研究統合情報センター 内地域研究コンソーシアム事務局
TEL：075-753-9620　・Fax：075-753-9602
E-mail：info@jcas.jp　・Home Page：http://www.jcas.jp/
印刷：(株) 土倉事務所　TEL：075-451-4844